

英国における水球 (Water Polo) 競技の始まりと ルールの変遷に関する研究

高木 英樹・真田 久

Historical origin and rule changes of water polo as a sport in Great Britain

TAKAGI Hideki and SANADA Hisashi

Abstract

The historical origin of water polo as a sport dates back to the formulation of a rule on "Football in the water" in 1870, London. In 1880s, water polo became a popular sport in Great Britain. After some international matches in 1890, it was put in practice in the 2nd Olympic Games (Paris) in 1900. Water polo is a first team sport to be adopted as an Olympic sport. There are, however, few studies about the historical origins either the rule changes of water polo in relation to the historical and/or the social background. The purpose of this study is to clarify the development process of water polo in Great Britain by focusing on the rule changes.

There were some features of the development process of water polo, one of them is that water polo was changed from an entertainment to an athletic sport. Another feature is that they modeled athletic sport after association soccer. In the beginning, water polo was introduced as an entertainment at the sea by the professional swimmers. By rising amateurism, a majority of players changed from professionals to amateur swimmers, and the nature of water polo became to an athletic sport.

As the early society of swimming modeled rules after rugby football, there were much rough plays in the games of water polo. With development of soccer, they structured after this model. They introduced goal posts and a horizontal bar after soccer, the goal was scored when a ball passed through the posts. With an improvement of the rules, water polo was much more attracted for both players and spectators, and it became one of the most popular sports at the end of 19th century.

Key words: Water polo, Football in the water, Professional swimmer, Amateurism, Sports associations

1. はじめに

1.1 研究の目的・意義

競技としての水球は、1900年の第2回オリンピック(パリ)において、エキジビション種目ながら団体競技種目としてはじめてオリンピックに採用される¹⁾など、国際競技としての歴史は古い。日本には1910年代に横浜や神戸に居留していた欧米人によって紹介され²⁾、1925年第2回明治神宮競技大会において正式種目として採用されて³⁾

以来今日まで、小学生から社会人に至る幅広い年齢層に楽しまれ、各カテゴリーでの全国大会が開催されている。

水球(Water Polo)の競技としての起源は、イングランドとされ、メトロポリタン水泳協会(ロンドン)が"Football in the water"のルールを作成するための委員会を1870年5月12日に設置した時代に遡る。その後、幾度のルール変更を経て、1899年に国際水球ルールが制定され、今日とほぼ同様

の「競技としての水球」が確立される。これまで、水球の母国とされる英国における水球発祥に関する記述はいくつか散見されるが⁴⁾、その時代背景と関連させて水球のルールがどのような経過で制定され、どのように変遷してきたかについてはほとんど明らかにされていない。

そこで本研究では、英国において水球が生まれる時代背景を考察しながら、水球がどのように生まれ、その後競技スポーツとしていかに確立されていくのか、その過程を水泳協会の変遷とルールの変遷をたどりながら明らかにする事を目的とする。

1.2 研究の方法

1.2.1 本研究の対象年代

1837年にNational Swimming Societyが組織され、スポーツとしての水泳が普及し始めて以降、余興として水中でボールを扱うゲームが生まれ、1870年に“Football in the water”のルールが制定される。その後、“Water Handball”、“Water Baseball”などと呼ばれながら次第に水球(Water Polo)として確立されていく。本研究では水球が競技として確立されていった1870年代から1900年までを対象とする。

1.2.2 史料

本研究で用いた水球に関する主な史料は以下のものである。

史料1 Sinclair, A. and Henry, W. (1893) : Swimming. Longmans, Green and Co.: London.

史料2 The Earl of Suffolk and Berkshire (1911) : The encyclopedia of sport & games. Heinemann: London, pp.237-243.

史料3 Amateur Swimming Association: Handbook for 1912 containing laws of swimming and rules of water polo, past and present champions, programme for the year, amateur swimming records (1912): J. C. Hurd (Eds.), Kensal Rise : Hanbury, Tomsett.

史料1は水泳に関する研究家、SinclairとHenryの著作で、競泳、飛込、ライフセイビング等の水辺活動に関する記述がされている他、1893年以前の水球に関するルールが納められており、水球の歴史を研究するための最古の史料である。史料2は英国のSuffolk卿とBerkshire卿が編纂したスポーツとゲームに関する辞典で、水泳のほか、ク

リケットやハンティングについての解説がなされている。史料3はアマチュア水泳連盟が制定したルールブックで、1912年以前の競泳および水球のルールに関して記載されている。

2. 英国における水泳の隆盛とその背景

2.1 19世紀英国における水浴の隆盛

19世紀初頭の英国において、スポーツとしての水泳が発展したが、その背景として、2つの大きな要因が考えられる。ひとつは水泳指導と浴場管理を行うプロフェッショナルの存在であり、もうひとつは、ケンブリッジ大学卒業生など社会的なエリート層を会員とするスイミングクラブの存在である。

もともと、英国人は海洋民族であり、その生活圏は、沿岸地域はもとより、内陸の水辺にも形成されていた。よって人々の自然水への関わり合いは深く、スコットランドの最も辺鄙な地域や最も寒い地域でも、河川での水浴は日常的な慣習であった。水浴の伝統については、当初温泉場にはじまり、続いて波の穏やかな海水浴場へと移り、18世紀中ごろから英国全土へと発展していった^{注1)}。

1828年にリバプールに公衆浴場が建設されたのを皮切りに⁵⁾、その後各地で急速に浴場が整備されたことから、水浴の伝統はさらに広まっていった。国家もこのプロセスを支援し、1846年には浴場施設への助成を通して、労働者階級が衛生施設を利用しやすくするための議案が国会で可決されている⁶⁾。このような状況は、様々な水中での活動の出現を助長し、後に水球の原型となる遊技や球技を生むことになる。

この当時、海水浴場や沿岸地方には多くのプロの水泳指導者が存在していたとされる。彼らは指導、広報、競技という主に3つの仕事を担当していたが、一部の者は浴場の管理も行っていた⁷⁾。これらの仕事はすべて金銭的な利益を目的としていた。彼らは、メンバーに対して泳ぎ方を教えて報酬を得たり、英仏海峡の横断^{注2)}などの偉業達成によって、あるいは賭けレースに出場することで賞金を得ていた^{注3)}。

プロとは異なり、もう一方のスポーツとしての水泳の担い手とされたのが、有名大学の卒業生をメンバーとするスイミングクラブ(SC)である。1855年に創設されたケンブリッジ大学SCを初めとして、1860年創設のブライトンSC、1864年の

サーペントイン SC、そして 1869 年のオッター SC など、これらのスイミングクラブのメンバーは、すべて社会的なエリート層から構成されている⁸⁾。そのためこれらのクラブでは、名誉と喜びだけのために泳ぎ、水泳におけるアマチュアリズムが重視されていた。

2.2 水泳協会の設立

John Strachan^{注4)}は、プロの活動を発展・強化させるために、1837 年に国家水泳協会（National Swimming Society）を組織した^{注5)}。国家水泳協会は 1837 年より賞金や高価な賞品を賭けた競技会を開催し、2 年後からは開催場所と運営者を替えながら競技の開催を継続した。

1860 年代に入ると、エリートを会員とするスイミングクラブが結成される。そのうちロンドンにある 5 つまたは 6 つのスイミングクラブの責任者が集まり、1868 年 11 月にアマチュアレースに関する規則を制定した。その後、これらのクラブによってメトロポリタン水泳協会（Metropolitan Swimming Association: MSA）が組織された⁹⁾。1869 年にはアマチュアに限定したスポーツ水泳を規定する最初の規則であるアマチュア水泳法（Laws of Amateur Swimming）が制定され、アマチュアとプロの相違、競技の運営条件および協会の運営規則などが 23 項目にわたって規定された¹⁰⁾。この結果、金銭のために泳いだ者や、資格に関わらず水泳で生活している者に対して、アマチュア資格が剥奪された。

その後メトロポリタン水泳協会は、大英帝国水泳連盟（Swimming Association of Great Britain: SAGB）と名を変えたが、アマチュア競技連盟（Amateur Athletic Association）の基本理念を参照して、引き続き賞金の懸かったレースやオープンレースを含めたプロが参加するイベントへのアマチュアの参加を禁じた^{注6)}。

しかしこの SAGB の意向に対して異を唱えるクラブも存在し、それらのクラブが結束し、新しい組織としてアマチュア水泳連合（Amateur Swimming Union: ASU）を設立した。そしてしばらく、アマチュアリズムの定義をめぐる ASU と SAGB の間で齟齬が生じる状態が続いた。しかし両組織の争いもアマチュア水泳連盟（Amateur Swimming Association: ASA）¹¹⁾ という新たな団体への統合をもって 1886 年 3 月 3 日に決着する。こ

の協会は今日においても英国のアマチュア水泳を統括している。ASA ではアマチュア競技連盟をモデルとし水泳のプロを次のように定義している¹²⁾：

- 1) 金銭対価を伴って、泳ぐ者またはその他の運動競技を実践する者、あるいは他の者の教育、訓練および管理する者。
- 2) 自らが獲得した全ての賞品を販売または換金をする者。
- 3) 公衆の前で泳ぎ報酬を得る者、あるいは管理者としてプールまたは他の施設で金銭または給与を対価に雇用された者。

合法的にイングランドを代表する組織として認知された ASA の成功により、全国レベルでのスポーツとしての水泳のルールが整備されると共に、段階的に地方レベルでの組織化も始まった。各地域における組織化の背景には、ロンドン支配を簡単には容認したくない北部地域のクラブの意向が反映されている。しかし ASA 勢力範囲は次々に拡大され、イングランド全土に及んだ^{注7)}。

3 英国における水球の発祥

3.1 水中での民族的フットボール

英国の各地で中世から伝統的に行われていた民族的フットボールには、川や池で行うものも存在した。

アッシュボーンやダービーでの告解火曜日（Shrove Tuesday）の祭典では、フットボールの試合が行われ、そこでは川での水中戦が展開された。アッシュボーンの町では、ゴールは互いに 3 マイル離れた二つの粉ひき場で、ゴールするためには、競技者は、最後に水車用貯水池を泳ぎ渡って建物に触れなければならなかった。その途中でヘンモア川にボールが入れば、水中での試合になった。このフットボールは遅くとも 17 世紀には行われていて、今日まで続けられている。Charles, C. の詩「厳寒に寄する戯歌」の中では、「勇猛果敢な連中が蹴球ボールを守ろうとせず濡れになる。よく知られたことだが、溺れ死になど怖がらないのだ¹³⁾」とうたわれているように、水中でのフットボールがふつうに行われていたことを示している。

ボールを手で扱う競技に移行した民族的フットボールも存在した。ロックスバラシャーのジェットバラのフットボールは、1704 年に危険であるという理由で中止することを町議会で決めているが、

その後も続けられた。フットボールよりハンドボールの方が危険性が少ないという理由で、水中戦を伴った昔のフットボールそっくりの方式で今日でも行われているし、スコットランドとの境界地方の都市ホーイックでも、フットボールから変形した一種のハンドボールが最近まで行われていた¹⁴⁾。

このように民衆レベルの祭典で行われていたフットボールは、河川などにおいて、すでに17世紀前半には行われていたし、それが水球に近い手で扱う形式の競技へと移行したのも存在していた。

これらのフットボールは水中戦になればなおさら、観衆の興味を惹き付けるものとなった。これらの熱狂的な水中でのフットボールの一部が、19世紀後半に見せ物として、水泳場に取り込まれた可能性も否定できない。

3.2 水上ボールゲームの試み

1860年以降、見世物として盛んに行われるようになった水上イベントにおいて、主催者はプロスイマーや、アマチュアとして活動できないスイマーのために、様々なレースや遊技をアレンジした。たとえば、競馬をまねた「ウォーター・ダービー」においては、スイマーが当時の駿馬の名前をつけた木製の頭付き樽にまたがってレースを行った。動き回るには大きなオールを利用し、ユーモラスなレースが展開された。この時スイマーは騎手と同様の衣装を身にまとい、本物の競馬に似せるため、わざわざ乗馬用の鞭も持っていた。またポロからヒントを得て、スイマーたちがスケッグ^{注8)}付きの樽に跨り、浮いているボールを求めてパドルで奪い合う水上ポロも行われた¹⁵⁾。

フットボールも時として水中で行われたが、水中では足を使ったボールのコントロールが困難であるため、対峙する2チームは決められたポイント(主にボート)までボールをいかに運ぶかを競い合った。ボールを運ぶにあたっては、あらゆる手段が用いられ、水中での激しいボールの奪い合いが繰り広げられた。

メトロポリタン水泳協会は、1869年にアマチュア・スイマーの規則を制定後、この水中でのフットボール(Football in the water)に目をつけ、普及のためのルール作成を担当する委員会を1870年5月12日に設置した¹⁶⁾。この新しいスポーツの基本理念は、サッカー型フットボールより、むしろ

ラグビー型フットボールに近かったと思われる(付録史料 1870年版ルール参照)。その理由として、サッカーは既に庶民に受け入れられ大衆化していたが、ラグビー型フットボールの方は中流階級上層の人々でプレイされており¹⁷⁾、メトロポリタン水泳協会の標榜するアマチュアの精神に合致したためという事が上げられる。

メトロポリタン水泳協会の動きとは別に、各クラブは、「水上ベースボール」や「水上ハンドボール」と称して、独自にルールを決めて、水中での球技を楽しんだ。メトロポリタン水泳協会の後継団体であるSAGBのメンバーも水中フットボールの試合をいくつか行うが、ゲームの内容が粗暴化し、次第に観衆やマスコミは興味を失っていった。主要なアマチュア・クラブのひとつであるオッターSCの記録を見ても、1876年7月13日のボーンマス、1877年のアパディーンとパーミンガム、そして1878年パートン・オン・トレントでの数試合が記載されているだけである¹⁸⁾。

3.3 スコットランドにおける水中フットボールの展開

ロンドンから遠く離れたグラスゴーでは、ボン・アコードSCの会長がクラブの定例競技会に、より多くの彩を添える手段がないかとスコットランド水泳クラブ連盟(Associated Swimming Clubs of Scotland:ASCS)の会長に尋ねたのを契機に、1877年にスコットランドで最初の水中フットボールに関する共通ルールが制定された¹⁹⁾。

ASCSの会長であるWilliam Wilson^{注9)}は、スコットランド水泳界の名士であった。彼は1844年11月にロンドンで生まれたが、幼少時代からグラスゴーに住んでおり、水泳に関するいくつかの著作を執筆している。Wilsonは、マンネリ化した水上イベントの単調さを一新するため、大衆遊技を参照しながら、水中フットボール(Aquatic Football)の規則を作成した。大まかなルールとして、1チーム3名編成でゴム製のボールを奪い合い、ゴールに置くことを競い合った。しかし最初の試合では流れが強く、ボールが流されてプレイの展開が思うように行かなかった。そこでWilsonは、数ヵ月後にグラスゴーで行われた試合では、穏やかな水域を選び、規則のいくつかの点を修正し、ゲームをより楽しくドラマチックにする工夫を行い、好評を得た²⁰⁾。それ以後、スコットラン

ドの水の祭典において、水中フットボールはなくてはならないものとなった。

その後も、Wilson は見世物という範疇の中で、ルールの改正を行った。例えば、フットボールをモデルとしてゴールキーパーを導入したり、また1チーム当たりのプレイヤー数を9人に増やしたり、さらにはプールの底に足を着くことを禁じた²¹⁾。1879年、このルールはグラスゴーのすべてのクラブに配布された。以後、このルールはスコットランドの公式ルールとしての性格を有し、各クラブに普及していった。

当時は、ボクシングやフットボールなどが、見世物として大衆に大変人気を博していたが、水中フットボールもその集団的な性格、肉体的なぶつかり合い、プールという空間の特異性、さらにはルールの単純性などを理由に、水の祭典に参加した観衆を魅了した。このルールの単純性は、サッカーとも共通するものである。

3.4 イングランドにおける Water Polo（水球）の展開

スコットランドにおける水中フットボールの隆盛に対して、イングランドでは1884年にいくつかのクラブがSAGBから脱退し、新たな団体としてASUが結成されるなど、混迷した状況にあった。これに危機感を抱いたSAGBのメンバーたちは、ASUに主導権を握られる前に、水中フットボールの大幅なルールの見直しを決断し、1885年にアマチュアリズムに関する新しい規範と共に配布した。このルールには、いくつかの「地域」に関する条項も盛り込まれ、ロンドン以外の地方のクラブに対しての配慮がなされた²²⁾。さらにスコットランドへの対抗意識の高まりに伴ってイングランドでの内輪もめともいえるSAGBとASUの争いに関して和解の機運が高まり、前述したように1886年に両者を統合したアマチュア・スイミング協会（ASA）が誕生した。そして1888年にはイングランド国内選手権開催のためのASAによる統一ルールが制定され、新しいルールにはWilsonの提案が大幅に取り入れられていた（付録史料 1888年版ルール参照）。

この統一ルールの中でようやく水球（Water Polo）という呼称が確定されたことになる。しかしながら、「水球（Water Polo）」と呼ぶようになった経緯についての明確な記述はない。競技に用い

られたインド製のゴムボールをヒンズー語でプル（Pulu）と呼び、それが訛ってWater Poloになったのではないかとされる²³⁾。いずれにしても1888年のASAによる統一ルール制定以後、水球（Water Polo）という名称が定着した。水球を統括する組織のもと、統一ルールが作成された1888年が、水球の競技スポーツとしての成立年代といえよう。

3.5 水球の競技的発展

ASAの統括下、水球の新しいビジョンは、大衆人気の獲得ではなく、遊技から競技スポーツへと如何に転換していくかに重点が置かれた。かつて水泳においてアマチュアリズムが確立されていったように、水球においても同様の動きが見られた。またASAによる水球の競技スポーツ化は、金銭のためにプレイするのではなく、クラブの名誉など象徴的成果のためにプレイすることの価値を高め、国内選手権の発足をも促した。最初のイングランド選手権は、1888年4月に開催され、オッター、テッドボール、ノーチラス、バートン・オン・トレントの4つのクラブが準決勝に進出した。決勝は、バートン・オン・トレントとオッターとの間で行われ、3対0でミッドランドのバートン・オン・トレントが初代チャンピオンの座に輝いた。さらに1889年、Sinclairによってロンドンにあるスイミングクラブの会議が招集され、ロンドン水球リーグを創設することが決定される²⁴⁾。21チームがこのリーグに参加し、最終戦でノーチラスがオッターを2対0で破って優勝した。また1891年にはオックスフォード大学とケンブリッジ大学との間で定期戦が開催されるようになった。

観客にとってより魅力的となった水球は、19世紀末のイングランドにおいて大成功を収めるようになる。それに伴ってイングランドルールが他国にも普及し、国際試合開催の機運が盛り上がる。そして1890年7月28日、ロンドンで初めてイングランド対スコットランドの国際試合が開催された。この国の威信をかけた試合において、イングランドルールを採用したにも関わらず、試合結果はテクニクに勝るスコットランドが4対0のスコアでイングランドに勝利している。1895年には、イングランドとアイルランド、その2年後にはウェールズ対スコットランドの試合が開催された²⁵⁾。

4. 水球ルールの変遷にみる競技スポーツ化（見世物からスポーツへ）

1870年にMSAが制定した初期のルール（Football in the water）と1888年にASAが改訂したルールとを比べると、水球の特性が2つの観点から顕著に変化していることが読み取れる^{注10)}。一つは、球技として参照したフットボールのモデルは当初はラグビー型であったが、やがてサッ

カー型へと移行したことである^{注11)}。もう一つは水球の位置づけが危険行為を許した見世物から、危険防止を織り込んだ競技へと変化したことである。

4.1 ラグビー型からサッカー型へ

1870年に制定されたMSAルールと1888年に制定されたASAルールの主な相違点を表1に示す。

表1 MSAルールとASAルールの比較

項目	MSAルール（1870年）	ASAルール（1888年）
試合時間	10分ハーフ	10分ハーフ、ハーフ間3分間休憩
ボール	規定なし	アソシエーションフットボール3号ボール
ゴール	浮島あるいはボート	ゴールポスト幅10フィート、クロスバーの高さは水面から3フィート（浅い場合には5フィート）
得点	所定の場所に適正にボールが置かれた場合	ボールがゴールポスト間でクロスバーの下を通過した場合
人数	規定なし	1チーム7名
レフェリー	レフェリー1人、得点審判員1人	レフェリー1人、ゴールジャッジ2名、計時係適宜

MSAによる初期ルールの11項目を検証すると、試合時間や反則、あるいは参加資格に関する大まかな規定のみが示され、プレイに関して非常に大きな自由度が与えられている。たとえば初期ルールでは試合時間のみが規定され、1試合20分、途中ハーフタイムでサイドを交代することが明記されている。しかしフィールドの空間的な境界や深さについては、何ら規定はない。初期の水球は、プール以外の河川や海でも行われる可能性があり、プレイ空間と非プレイ空間との物理的な境界を設定することが困難であったことが背景にある。またゴールに関しては、両キャプテンが試合開始前に相談してターゲットとなる物を決めた。一般的には、ボートあるいは浮き桟橋等がターゲットとなった^{注12)}。プレイヤーの人数も決められておらず、その場にいる人数次第であったと思われる。ボールやプレイヤーのユニホームに対しても特別な注意は払われなかった。

また得点するためには、指定されたボートまたは浮き桟橋にボールを保持したまま置く必要があった。つまりラグビーのようにパスされたボールを、ターゲット内に持ち運ぶ必要がある。そのためゲーム中は、個人または集団で泳ぎながらボールを運ぶ技術が重視され、時にはラグビーのようにモールを組んで、相手陣地に攻め入る集団的戦

術が多用されるゲームであったようだ。またボールはプレイヤーから別のプレイヤーへとパスすることが可能であるほか、ボールを保持するプレイヤーが自ら水面あるいは水中を運ぶことが可能であった。時には、ボールを水着の中に隠し持つなどして相手の目を欺くこともあったようだ。

またボールがサイドラインを越えてエリア外に出た場合には、審判が出た位置からボールをエリア内に投げ入れるが、その際もラグビーのラインアウトと同様に両チームに対してボールを確保する同等のチャンスが与えられた。

このように初期のルールでは、ラグビー型フットボールの影響が大きかったが、1870年代後半以降のルールでは、サッカー型フットボールの影響が徐々に増していった。ボールやゴールの規定がサッカーを参考にして決められていったことがそれを示している。1863年に協会が設立されたサッカーでは、1872年にボールのサイズを決め、1875年にゴールにクロスバーを導入し、1890年にはゴールネットを採用した。さらに1880年にスローインを片手から両手で投げるように変更、1891年には線審の導入、キーパーへのチャージングの反則を導入、ペナルティキックの導入を行った²⁶⁾。これら一連のルール改正は、危険防止と競技内容のおもしろさを引き出し、国際的な標準となる競

技スポーツとして確立することをめざしたものであった。このサッカーのルール改正を念頭に、水球もルール改正を加えて行くことになる。

1879年、水球のターゲットはサッカーのゴールと同じになった。すなわち、水平の台ではなくなり、縦型のゴールとなった。またゴールキーパーの役割にも問題があったことから、ゴールのサイズは少しずつ小さくなっていく。1885年には幅10フィート（3.05m）、翌年には幅7フィートで高さ6フィート（2.13m x 1.83m）、その後、幅10フィート、奥行3フィート、高さ5フィート（3.05m x 0.91m x 1.52m）と変わっていった。さらに、ゴールキーパーがサッカーと同様にセイビング技術を十分に発揮できるよう、ゴールのクロスバーの高さは水の深さに応じて変化させた。水深が5フィートを超える場合、クロスバーは水面上方3フィートとし、水深が5フィート未満の深さの場合、水底から8フィートとした。

ゴールキーパーは当初から他のフィールド・プレイヤーとは区別されており、ゴールキーパーだけがボールを両手で扱うことができ、ゴールを守るために水底に立つことが許された。しかし、1888年以降においては、ゴールから4ヤード以上離れることはできず、フリースローのボールを受けることはできないなどの制約もある。また、ボールをフィールドに入れた後、他の選手がボールに触れない限り、再度触ってはならないバックパスを禁止する条項も盛り込まれた。

得点に関しても、当初ボールをターゲットに保持したまま置くよう規定されていたが、サッカーと同様にボールがポストと水平バーとの間を完全に越えた時にゴールとなるよう得点条件が変更された。これによって水球は水中の格闘ゲームから、パスのゲームへと大きく転換が図られたわけである。

次に、ボールについても初期ルールから大きな変化が見られた。1870年にはボールのサイズに関する規定はないが、サッカーボール、あるいはゴム製の柔らかいボールが利用されていたと思われる。当初は、水中で保持したり、水着の中に隠すために、比較的小さなボールが利用されたにちがいない。1888年には、ボールはアッソシエーション・フットボールの3号ボールと指定し、ボールの最小円周は25.1インチ（63.8cm）に設定された。その後、サイズはより大きくなり、最小円周26.5

インチ（67.3cm）、最大円周28.5インチ（72.4cm）のより大きなボールが使われた。当時水球用ボールの既製品はなく、ホームチームが独自に用意することになっており、そのためボールの大きさにある程度幅を持たせたのであろう。1896年からは、両手でボールを扱うことが禁止されたため、サッカーボールとは異なり、ハンドリングが容易で、さらに耐水性に優れたボールが使用されるようになった。

4.2 危険行為防止への配慮

ゴール型球技の中では唯一水球のみが両手でボールを扱うことを禁じている。初期のルールでは両手でボールを扱うことは禁じられていなかったのに対して、後年禁止された。その理由は、ボールをめぐる水中でのプレイがあまりにラフであったため、水中でボールを保持しにくくし、パスをつないでボール展開するように仕向けるためであったと思われる。それは得点条件の変更とあいまって、水球の競技としての性格を大きく変えるものであった。

1899年のルール改正では、それまで激しかった身体的な接触を大幅に制限するよう、敵の選手に対するファウルについて多くの条項が規定された。主な条項としては、ゴール近くでの密集化を排除するために、敵のゴールから1ヤード内に攻撃の選手が留まることを禁じること、あるいはディフェンダーがボール保持者を追い詰めたとき、ボールを水中に保持することを禁じることである。さらに、直接ゴールは不可であるものの、ファウルがあった箇所からのフリースロー、ゴールの周り4ヤードのところではファウルがあった場合のペナルティースロー、故意にファウルを犯した選手の一時的退水など、厳しい罰則が規定された。

しかしながら水中でのボールをめぐる選手のぶつかり合いは、水球の醍醐味であるので、身体接触を全面的に禁じたわけではない。それを裏付けるように、選手同士の激しいプレイによって水着が破れ、醜態をさらす事態を想定し、水着の下にカルソン^{注13)}の着用がルールで義務付けられた。基本的には、危険なプレイに対しては罰則を強化しつつ、球技としてより展開の速いゲームを目指したといえる。さらに試合時間が、7分間（これはゴール後のゲーム再開までの停止時間は含まれない実際の時間）を2度行うよう短縮され、ゲー

ムはさらにダイナミックになった。またサッカーに固有なコーナーからのフリーキックの原則も、プレイヤーが自陣のゴールラインからボールを出したケースに適用され、サッカーの要素をより多く取り入れることになった。

4.3 観戦者に対する配慮

次にルールの変遷を別の観点から見ると、ルールの変更は観客の立場からより魅力的にする必要性とも関わっている。このことは、ゲーム進行の分かり易さとも関連する。水球は、水中でプレイするがゆえに観客にとってもレフェリーにとっても選手の動きを捉えにくい欠点があった。そのためゲームをよりクリアーにすることに関心が向けられた。そこで1チーム当たりの選手の数を段階的に削減することが検討され、1879年には「およそ9人」だったのが、1885年には上限が8人とされ、1886年には最終的に7人に決められた。同じ理由により、プレイヤーは異なる色の帽子を着用することになる。1889年には、一方のチームは青色、他方のチームは白色、そしてゴールキーパーは赤色の帽子の着用が義務付けられた。

観戦しやすくするための工夫は、フィールドの大きさにも及んだ。ASAが制定したルールでは、イングランドのプールの多様性をも考慮して、ゴール間の距離を20から30ヤード(18.28m~27.42m)に規定した。また4ヤードとハーフ・ラインの位置が分かるようにプールサイドに目印が置かれた。

また観客にとってはゲームの中断を最小限にとどめ、より展開の速いゲームが望まれるので、ボールがタッチラインから出て、外部の障害物に当たって跳ね返った場合も、ゲームは継続していると見なした。

当時の試合においては、観客が勝敗をめぐる賭けを行うことも多く、試合を公正に進行させることは大変重要な課題である。そのため審判や競技役員の数と役割が追加・変更されている。1870年のルールでは、試合の展開を統括するレフェリー1名と得点されたかどうか判定するアンパイヤー1名がルール上規定されているに過ぎない。よってレフェリーは、試合開始の合図、競技進行統括、計時、コート外に出たボールの投入など、1人で何役もこなさなければならなかった。その後1885年には、アンパイヤーの数が2名に増え、各

チームが1名ずつ指名することができ、レフェリーも登録された公認レフェリーから指名されることになる。1892年には、試合時間がファール後や得点後のロスタイムを除いた正味7分となり、時間を専門に管理する計時係りが追加され、より組織化された体制下で公正かつ魅力ある水球が展開されるようになる。このほか、初期のルールでは、プロ選手の参加を念頭に置き、金銭や賞品の授受に関する規定も盛り込まれている。

水球ルールの変遷を辿ると、モデルとする対象がラグビー型フットボールからサッカー型フットボールへと転換し、位置づけが見世物から競技スポーツへと変化する過程を映し出している。しかし実際にプレイされた水球が協会や上層部の思惑どおり、うまく質的变化を遂げ、メジャーな競技スポーツへと転換を図れたかと言えば確証はない。何故なら、19世紀末の英国での水球ゲームに関して、詳細な記述が少ないからである。たとえ記述があったとしても、クラブや協会の年次報告書に試合結果のみが記載されている程度で、試合内容に関する詳細は不明である。また一般報道においても、水球を熟知していない新聞記者が、ゲーム中に生じる暴力沙汰など、ゲームの本質とは関わりない事件を伝えるに過ぎず、当時のプレイの状況をうかがい知ることは難しい。しかしながらルールを見る限り、1892年の時点で、コート、ゴール、ボールに関する規格、試合時間あるいは反則となるプレイの規定などについては、ほぼ現行と同じルールが採用されていることから、19世紀末の時点で競技スポーツとしての水球が確立されつつあったといえる。

5. まとめ

民族的なスポーツとして行われていたフットボールの中に、水中でのフットボールも含まれてはいたが、英国における競技スポーツとしての水球は、公衆浴場の普及や水泳のプロの存在、さらには観客を楽しませるための余興の必要性などを背景として始められたものである。そしてエリートによるスイミングクラブの結成やアマチュアリズムの勃興など、社会情勢の変化と絡みながら、複雑なプロセスを経て、人為的に作られたスポーツといえる。

黎明期における水球の変遷を辿ると、「ラグビー型からサッカー型へ」、「見世物から競技ス

ポーツへ」という2つの特徴が見られる。最初に考案された水球は、大衆がプレイを楽しむための球技ではなく、プロが観客を魅了するための水上アトラクションであり、「競技スポーツ」といえる存在ではなかった。また当初のルールは、初期のフットボールあるいはラグビー型フットボールに近く、集団的闘いが重視され、かなりラフなプレイが目立った。しばらく見世物の範疇で水球は発展を続けるが、1888年にASAが統一ルールを作ることによって競技スポーツへの転換をはかることになった。

水球の担い手がプロからアマチュアへと引き継がれると、よりスピーディーな選手の連携を重視する競技スポーツへと変化していった。またアマチュアリズムの浸透により、金銭的報酬のためではなく、プレイすることの喜び自体のために水球を行う風潮が定着する。そして個人やクラブの名誉といった抽象的価値が認識され、1888年イングランド選手権が開催されるなど、競技スポーツとしての水球が発展していった。1892年には国際統一ルールが制定され、国際試合が行われ、競技としての水球がさらに洗練され、国内で大きな人気を呼ぶことになる。サッカーは1882年に国際統一ルールを作り、1883年に国際大会を行っている。水球もこのような流れと軌を一にして進んでいったといえる。

この流れは英国国内だけに留まらず、ヨーロッパ大陸や新大陸にも伝播していった。1900年の第2回パリオリンピックでは、エキジビション種目ながら水球がオリンピック団体競技として初めて実施されるなど^{注14)}、当時の欧米社会において注目されていったことがうかがえる。

注

注1) 18世紀中頃以降、次に示すような海水浴に関する多くの手引書や専門書が出版されていき、海水浴普及のようすが裏付けられる。例えばNichols, T.L. (1870): *Bathing and swimming without danger of drowning*. Aquatic Safety: Great Malvern. , Walter, S. (1900): *Baths and bathing*. Every-day help series: London. , Tuer, A.W. (1880): *Luxurious bathing*. Field & Tuer: London.

注2) Matthew Webb(1848年1月19日生まれ)は、1875年8月24日にDover(英国)を出発し、Calais(フランス)まで、伴泳船に見守られながら、21時

間45分かけて単独で英仏海峡横断に成功した。彼の偉業達成のために、市民から1400ポンドが基金に寄せられた。Terret, T.: op.cit., pp.28-29.

注3) Ralph Thomasは、自書の中で”betting was life and was of more importance than swimming”(賭けがはやり、泳ぐ事よりも賭けることが重要とされた)と記述している。Thomas, R.: op.cit., pp.59.

注4) John Strachanは、ロンドンのワイン商で、伝統的なライフセーバーなど団体には所属せず、水泳をスポーツとして振興させるために尽力した。Terret, T.: op.cit., p.21.

注5) National Swimming Societyは、のちにBritish Swimming Societyと呼ばれた。Thomas, R.: op.cit., p.56.

注6) マチュア競技連盟では1866年に次の者はアマチュアではないと定義していた: プロ選手が出場するオープン競技会、金銭的報酬のある競技会、入場料を徴収する競技会などに参加したことのあるジェントルマン、賞金や公的な資金や入場料を得ようとするプロ選手と一緒に競技したり、生計の手段として競技的な練習を教授したり指導したことのあるジェントルマン、および機械工、職工、労働者など。Glader E.A. (1978): *Amateurism and Athletics*. Leisure Press: New York, p.77.しかしこの定義は、競技に参加する人々に、さまざまな矛盾を生じさせた。

注7) ASAは1889年には、Northern Counties, Midland Counties, Southern Countiesの3つの連盟に分割され地域ごとに統括を行った。さらに1901年にはクラブの増加に伴い再度地域分割が実施され、North Eastern CountiesとWestern Countiesの連盟が追加された。Thomas, R.: op.cit., p.315.

注8) 船を安定させるために船底に取り付けられた板状の突起物

注9) William Wilsonは、水泳のプロインストラクターの経験を持ち、初代のライフセービング協会の会長にも選出され、水泳に関する多くの著作を残している。例えば、Wilson, W. (1883): *The Swimming Instructor: a treatise on the arts of swimming and diving and how to save life*. H. Cox: London..

注10) 付録史料のうち、1870年版とMSA(Metropolitan Swimming Association)水球ルールと1888年版ASA(Amateur Swimming Association)水球ルールを参照のこと。

注11) 1863年にサッカー型のフットボールアソシエーションが設立されると、ラグビー型フット

ボールはその協会には入らず、1871年にラグビーユニオンを結成するなど、サッカー型とラグビー型に分かれていた。

注 12) これらのルールは形式は1863年にフットボール協会(サッカー)の統一ルール14カ条とよく似ている。ただし、サッカーの統一ルールでは、ボールが二本のポストの間またはその空間の上を通過した時にゴールと認めている。

注 13) 水着の下に着用するアンダーウェア

注 14) セーヌ川で2日間にわたり、ベルギー、ドイツ、フランス、イギリス出身の7チームで試合が行われた。イギリス・マンチェスターのOsborne水泳クラブが優勝した。Mallon, B. (1998): *The 1900 Olympic Games*. McFarland & Company: North Carolina and London, pp.244-245.

引用文献

- 1) Mallon, B. (1998): *The 1900 olympic Games*. McFarland & Company: North Carolina and London, pp.244-245.
- 2) 杉田忠治, 吉本祐一, 安部輝太郎 (1933): 水球ウオーターポロ, 駿南社: 東京, pp.6-17.
- 3) 日本水泳連盟 (1969): 水連四十年史, 日本水泳連盟: 東京, p.54.
- 4) 例えば Rajki, B. (1958): *Water Polo*, Museum Press Limited: London., Juba, K. (1972): *All about water polo*. Pelham Books: London., Smith, J.R. (1989): *The world encyclopedia of water polo*. Olive Press Publications: Los Olivos, CA.および Charroin, P. and Terret, T. (1998): *Une histoire du water-polo*. L'Harmattan: Paris.
- 5) 史料 1, p.413.
- 6) Campbell, A. (1918): *Report on public baths and wash-houses in the United Kingdom*. University Press: Edinburgh.
- 7) Terret, T. (1995): Professional swimming in England before the rise of amateurism, 1837-75. *The International Journal of the History of Sport*, 2(1): 18-32.
- 8) Charroin, P. and Terret, T. (1998): *Une histoire du water-polo*. L'Harmattan: Paris, p.23.
- 9) 史料 1, p.335.
- 10) Charroin, P. and Terret, T.: *op.cit.*, p.23.
- 11) 史料 1, p.315.
- 12) 史料 3, p.17.
- 13) F.P.マグーン著 忍足欣四郎訳 (1985): フットボールの社会史, 岩波新書: 東京, p.165.
- 14) 同上書, p.166.
- 15) Juba, K.: *op.cit.*, p.17.
- 16) 史料 1, p.258.
- 17) ダニングエ E., シャド K., 大西・大沼訳 (1983): ラグビーとイギリス人. ベースボールマガジン社: 東京, pp.160-161.
- 18) 史料 1, pp.259-260.
- 19) 史料 1, p.266.
- 20) Charroin, P. and Terret, T.: *op.cit.*, p.28.
- 21) *Ibid.*
- 22) 史料 1, pp.263-266.
- 23) Wigo, B. (1996): *The history of USA water polo in the Olympic Games*, the Olive Press, Olive, CA.
- 24) 史料 1, p.272.
- 25) 史料 2, p.431.
- 26) Signy Dennis (1968): *A Pictorial History of Soccer*. The Hamlyn Publishing Group Ltd.: London, pp.17-42.

(抜粋)

付録史料: 水球ルール

1870年版 MSA (Metropolitan Swimming Association) 水球ルール

1. 試合時間は20分とする
2. キャプテンは合議あるいはトスによってゴールを選択する
3. ゲームの開始時、レフリーはコース中央にボールを投げ入れる。ゴールキーパーを除いてすべてのプレイヤーはそれぞれのサイドから直ちに入水をする。ゴールキーパーは最適と思われる方法で、プールサイドに留まり、ゴールを防御してもよい。
4. ボールはある選手から別の選手にパスするか、水上あるいは水中を運んでゴールを狙う。
5. 水上、水中に関わらず、いかなるプレイヤーもゴールキーパーのプレイを妨げたり、ボールを保持していない敵側プレイヤーを捕らえてはならない。もしこのルールに反した場合には、ファウルが起こった場所で敵側プレイヤーにフリースローが与えられる。
6. 得点は、所定の位置におかれた浮島あるいはボート上に適正にボールが置かれた場合に与えられる
7. もし、プレイ中にボールが両脇のコースを超

えて外に出た場合には、審判は速やかにボールが出た位置にボールを投げ入れる。しかしボールが浮島あるいはボートを超えてコート外に出た場合には、浮島あるいはボート上からゴールキーパーがボールを取り、投げ入れる。

8. 得点がされた場合、アンパイヤーが速やかに笛をならし、プレイを中断させる。
9. 各チームはハーフタイムでゴールを交換する
10. 水球の試合に参加するために選抜された競技者が、その試合に参加しなかった場合、この競技会で獲得したであろうすべての賞品等を受け取る権利およびタイトルを得る権利を喪失する。
11. 紛糾した場合やこれらのルールによって規定されないすべての状況に関してもアンパイヤーあるいはレフェリーが裁定を下す権限をもつ。

1888年版 ASA (Amateur Swimming Association) 水球ルール

1. ボール - ボールはアソシエーションフットボールの3号ボールを用い、直径が8インチ以上9インチ以下とする。ボールはホームチームが用意するものとする
2. ゴール - ゴールは、幅10フィート、クロスバーの高さは、プールエンドの水深が深い場合には水面から3フィート、水深が浅い場合には5フィートとする。もし両方のエンドが深い(水深5フィート以上)場合には、両エンドのクロスバーは水面から3フィートとする。ゴールポストは、少なくともプールエンドから1フィート離して設置する。ゴール間の距離は、20ヤード以上30ヤード以下とする。ゴールポストは、ホストチームが用意するものとする。
3. 水深 水深は3フィート以上とする。
4. チーム - 各サイドは、7人以下で構成され、選手は色の異なる帽子あるいは水泳パンツかコスチュームを着用する。
5. 時間 試合時間は、10分ハーフの20分間とする。エンドを交代するために3分間のハーフタイムが認められる。判定が紛糾して経過した時間は、試合時間の中には数えない。
6. キャプテン - キャプテンは、実際にプレイするメンバーの一員であり、両キャプテンは、チームを代表して試合のすべての準備に関して合意したのち、エンドを選択するためのトスを行う。もしキャプテン間で合意の得られなかった点に

関しては、レフェリーがその点について決定を下す。

7. オフィシャル - オフィシャルは、1人のレフェリー(計時係りが補助を行う)と2人のゴールジャッジから構成される。
8. レフェリー - レフェリーの責務は、ゲームを開始し、不正なプレイを止めさせ、すべてのファールに関する判定を下し、ルールが適正に遂行されているか監視する事にある。レフェリーは、競技者の要求が無くてもファールを宣告する事ができる。レフェリーの判定が最終決定である(規則13の大会規定を参照)。
9. ゴールジャッジ - ゴールジャッジは、各プールエンドに立ち、自分が担当するゴールに関して、得点されたかどうかを判定し、得点された場合には旗によって示さなければならない。ゴールジャッジは、エンドを交代しない。
10. ファールの宣告 レフェリーは、笛を吹いてファールを宣告しなければならない。ファールが宣告されたら、競技者はどちらのサイドにフリースローが与えられるのかが明示されるまでは、各ポジションに留まっていなければならない。
11. ファール - 以下をファールとする。
 - (a) 両手同時にボールに触れた場合(ゴールキーパーはこのルールから除外する)
 - (b) ゴールキーパーを除いて、相手を妨害してボールに触れる事。あるいはゲーム中プールの底に立ったり、何かにつかまってボールを取ろうとする事。
 - (c) 休憩以外の目的で、ゲーム中プールサイドやプール内のレールをつかむ事。
 - (d) プレイしていないあるいはボールを保持しない相手選手を妨害する事
 - (e) 腕の下にボールを保持して運ぶ事。
12. ペナルティー - 各ファールのペナルティーとしてファールが起こった場所から相手サイドにフリースローが与えられる。ボールが他の選手に触れない限り、直接シュートし、得点する事はできない。
13. ウィルフルファール - レフェリーの意見としてある選手が故意のファール犯した場合には、レフェリーは初めに警告し、次にその選手を得点されるまでの間、退水させる権限を持つ。
14. ゴールキーパー - ゴールキーパーは、ゴール

を守るために立つことが許される。しかし立っているときハーフラインを超えてボールを投げる事はできない。これに違反した場合、ペナルティーとして相手側サイドにハーフラインからのフリースローが認められる。ゴールキーパーは、規則 11 の(a)、(b)の摘要から除外されるが、ボールを保持している場合は他のプレイヤーと同様に扱われる。

15. スコア - 得点は、ボールがゴールポスト間でクロスバーより下を通過した場合に記録される。
16. 離水 プレイ中にいったん水中を離れたプレイヤーは、ハーフタイムを除いて、得点されるまであるいはハーフタイムになるまで入水する事はできない。
17. 開始 プレイヤーは各自陣のゴールラインに位置し、入水しなければならない。レフェリー

は、コースのセンターライン上に立ち、各キャプテンに対して準備する事を促し、「ゴール」の掛け声と共に中央にボールを投げ入れなければならない。

18. アウトオブプレイボールがコート外に出た場合には、ボールの出た箇所のライン上でプール中央にレフェリーがボールを投げ入れる。
19. ゴールラインとコーナースロー - あるプレイヤーが味方ゴールラインを越えてボールを投げた場合には、相手側にコーナースローが認められる。しかしもし攻撃側が出した場合には、相手側にフリースローが与えられる。
20. 相手ゴール内に留まる選手 - いかなるプレイヤーも相手側ゴール内に位置してはならない。あるいは、ボールがゴールキーパーの前にある間にゴールキーパーの後ろにも位置してはならない。